

水俣病について：自然と社会、出来事と言葉のはざままで

下地明友

1. エビデンスと語り

- ・ <概念>の世界（脳の意識） ・ <感覚>の世界（自然） 「出来事」と「言葉」
- <計測できるものだけ><計測できているものだけ>が<判断の基準>になりがち。

2. 人間というものの認識する方法と解釈

- ・ 認定基準を「客観的」に作る過程で、<人間という部分>というものが削られた、あるいは括弧に入れられた。
  - ・ しかし、その<括弧に入れられた部分>を削らないことが大切ではないのか。
  - ・ <人間的な部分>は、脳的なもの（意識）、内臓的なものと深く関わっている（過剰・過少）。
- ※水俣病事件史の過程において、医学（科学）が社会（X）に取り込まれてしまった。

3. いかにして<神話>から抜け出すか：神話的なものと神的なもの（ベンヤミン）

- ・ 「認定」は人間のためではなく、まるで認定制度のためにやっているかのよう。

4. 『苦海浄土』石牟礼道子（河出書房新社）1969、2011.

泉のような書物。 <臨床民族誌>の最高傑作であり、柳田國男の『遠野物語』に比類するもの；「願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ」。

『わが死民』（1972、2005）

5. 『死民と日常 わが水俣病闘争』渡辺京二、2017

渡辺氏が「幻視していたもの」の極めて重要性

「緒方さんは今でも、チッソはおのれの犯した罪を近代が犯した罪と自覚して、それを償うために、生命のよみがえりを求める人びとと共働すべきだ、チッソにそういう罪滅ぼしをさせねばならぬと考えています。・・・しかし、提案することが、実はチッソに最も本質的な責任を課す行為になっていることを認識すべきです」「この世界によみがえりがもたらされるのなら、営利を事とする一企業にさえ目覚めがやってくるような、幻のような日を見つめ続けることによってしかない」（2016）

6. ①<疫学的被害調査>の喫緊の課題

「水俣病事件とは何か」の究明には欠かせない疫学的な調査や研究がいまだに行われていない（富樫貞夫；令和元年12月17日、熊本日日新聞）。

②<メチル水銀被爆者健康手帳>の交付

「原爆のとき広島・長崎で取られた方法のように、あらゆる疾患に通用する原爆手帳みたいなものが水俣病でも必要である。認定などという姑息なことではなく、一定の汚染地区の全住民に健康手帳を交付してこの人たちが全国どこへ行っても長期に健康管理できるよう考えるべきである。」（原田正純『水俣病』岩波新書1972、昭和47年）

## 7. <水俣病神話>

- ・神話その1 診断には神経内科専門医以外では正確な診断は困難
- ・神話その2 症状は変動しない
- ・神話その3 暴露の停止から発症までは数か月から数年程度

## 8. Life span からみる病変分布、程度(病像のダイバーシティー)

「同じ agent というものが、出産をさしはさんで、その前後における脳の発育過程のどの時点で作用したのか、あるいは脳が完成した後で作用したかによって、その病変の局在の問題、その性格それ自体もずいぶん違ってくる。」(白木)

## 9. 症状の多様性:<病いの星座> 「神は細部に宿る God is in the details」

### 10. ・疫学的方法:生態的・地政学的方法

- ・一人ひとりの語りという方法: 次元が違う

### 11. ・自然としての身体 ・社会の中の身体

### 12. 苦しみに<名前>がない時、人は・・・

:「いわれのない苦しみ、意味のない苦しみに耐えることはできない。苦悩はその原因が発見されない限り人々を不安に落とし入れる・・・苦しきは絶えずその解説を待っている」M.エリアーデ『永遠回帰の神話』1949

### 13. “コスモス”と“人工世界”

### 14. 「悶え神」「傷ついたストーリーテラー」

### 15. Care-giving : Presence (現前性)。Present=Gift

### 16. 「無知」「不可知の部分」「不確かな部分」

<知の固定化>というブラックホールへの転落

### 17. ありうべき「共同性」への通路(創造/想像)

### 18. エントロポロジー:レジリアンス、コラプソロジー

- ・ボデイ・サイレント ・社会的な生存と自然界における生存
- ・社会脳(広報)と非社会脳(現実)